静岡・中村（なかむら）遺跡

1　所在地　静岡県浜松市西伊場町

2　調査期間　二〇〇〇年度調査　二〇〇〇年（平12）四月～二〇〇一年三月

3　発掘機関　㈶浜松市文化協会・浜松市博物館

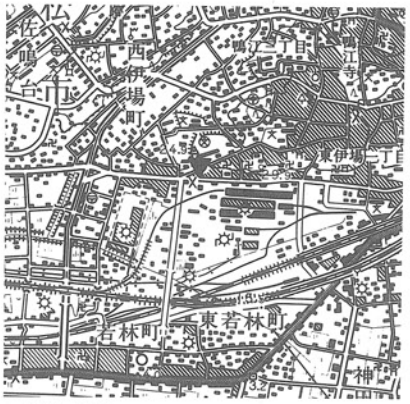
4　調査担当者　鈴木敏則・鈴木　靖

5　遺跡の種類　官衙関連遺跡

6　遺跡の年代　七世紀～九世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

中村遺跡は、静岡県西部の天竜川と浜名湖の間に形成された海岸平野に立地する。遺跡は東西に延びる第一砂丘上にあり、北側には三方原台地が波で洗われてできた海蝕崖、南側には埋没河川（梶子北大溝）が存在する。



（浜　松）

発掘調査は、浜松市の中心部から浜名湖東岸の浜名郡雄踏町に抜ける県道（通称雄踏街道）の拡張工事に伴い、一九九九年から行なわれている。一九九九年度の調査では、七世紀末から中世までの木簡一一点が出土した（本誌第一二号）。今回の調査区は、中村遺跡では最も西に位置する所で、SD〇二とした溝から木簡三点が出土した。

SD〇二は、幅約四mで、全長六〇mにわたって検出され、出土土器から八世紀代の溝と考えられる。梶子北遺跡の「大領石山」と記された木簡など八点（本誌第一七号）が出土した地点から、県道を挟んで北へわずか数十mの所にあたる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　155×23×2　051

「□〔宗カ〕義マ益□□〔万呂カ〕」

(2)　196×25×3　051

「丈マ尻塩」

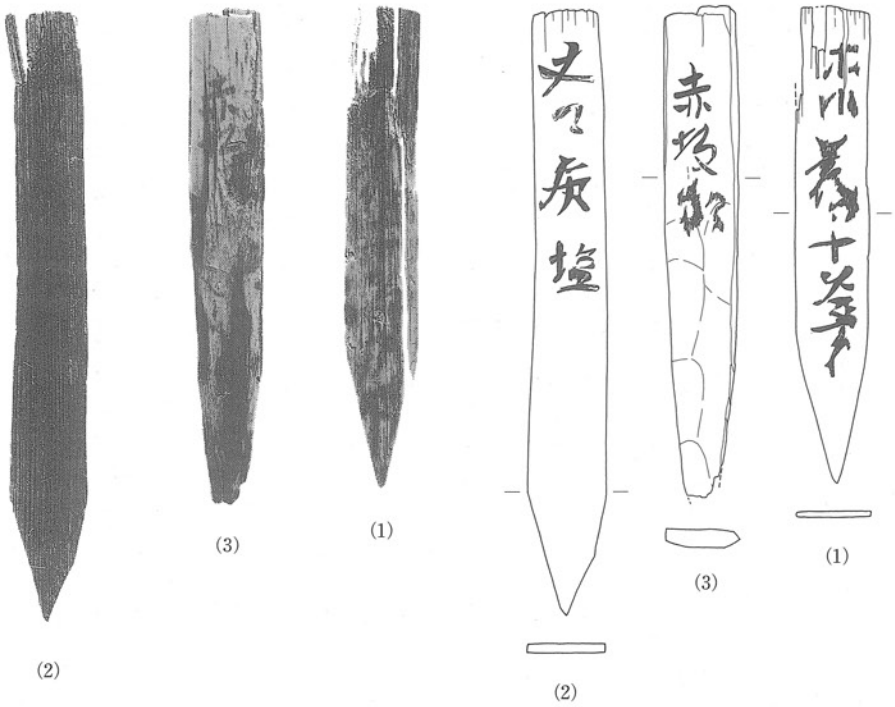
(3)　(159)×23×6　051

「赤坂□〔郷カ〕」

(1)は、上端の一部を欠損するだけで、ほぼ原形を留めている。上端は平らで、下端を尖らせる。人名だけを記した付札木簡である。ソガのガを「義」と表記するのは、伊場遺跡群では初出で、最も一般的なのは「宜」、次いで「我」「可」がある。梶子北遺跡では二・三号木簡に「宗宜部」と記した例が、一九九九年度の本遺跡には一号木簡に「宗我部」の例がある。

(2)は原形を留めたもので、上端は平らで、下端を尖らせる。「丈部尻塩」という人名が記された付札木簡である。「丈部」は伊場遺跡群では初出である。

(3)は下端を少し欠くが、上端が平らで下端を尖らせる形態は、前二点と同じである。上の「赤坂」ははっきり判読できるが、「郷」は二次的に削られているためかはっきりしない。これより下の文字は、削り取られているようである。「赤坂」は、『和名類聚抄』にも見られる遠江国敷智郡の郷名である。郷名の後に人名がくる付札木簡であろう。「赤坂郷」は、梶子北遺跡出土五号木簡にも例がある。

なお木簡の釈読については、奈良女子大学の舘野和己氏、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏・馬場基氏・市大樹氏にご教示いただいた。

（鈴木敏則）